

満洲文字の文字表をめぐって(6)

—無圏点満文と有圏点新満文の b と p、f と w、bi と fi—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：今回は、まず母音の検討の続きとして、早田輝洋(2011b)<sup>1</sup>に於ける  $\text{ᡵ}$   $\text{ᡶ}$   $\text{ᡷ}$  の用法にかかわる「満文原檔」の無圏点満文の一部(荒字檔と昺字檔)の調査結果を検討し、男性語への使用が極端に少ないことから見て、無圏点満文の  $\text{ᡵ}$ ,  $\text{ᡶ}$  を「女性語的」に使用していると言っても不都合はなさそうであることを確認しました。次いで「満文原檔」の無圏点満文の n, k, g, h と有圏点新満文とを比較し検討しました。無圏点満文の k に特徴がみられましたね。

吉池 男性語中の子音の前の k が、檔案文書の“本行”(“行間”の補筆訂正文と、“本行”の文を区別する必要がある)において、男性文字  $\text{ᡵ}$  ではなく、女性文字  $\text{ᡶ}$  で現れるのが、ふつうのありかたでした。もっとも行間の補筆訂正文では二点が付されない  $\text{ᡵ}$  であらわれます。有圏点新満文では  $\text{ᡶ}$  で現れるので、この点も異なるところです。

中村：有圏点新満文において、男性語中の子音の前の k が二点を付した  $\text{ᡶ}$  で現れるのは興味深いものです。モンゴル語文にも、無圏点満文にもみられない特殊な用法です。この特殊な用法は、「満文原檔」の無圏点満文に見られる男性語中の子音の前の k が女性文字  $\text{ᡶ}$  で現れるという特殊な用法から発展してきたのではないかとわれわれは想定しました。

無圏点満文                      有圏点新満文  
男性語 ( $\text{ᡵ}$ +子音) → 男性語 ( $\text{ᡶ}$ +子音)

吉池：有圏点新満文の k, g, h における圏点についても検討しましたね。h に付される圏(◦)は、ガリック文字から発想を得たのではないかと、という意見もでました。もっとも圏(◦)用いられるようになった経緯については、検討すべき問題がいくつか残されており、今後の課題としました。

中村：今回は、「満文原檔」(荒字檔、昺字檔、洪字檔(一部)による。これ以後、必要な場合を除き字檔名は省略する)の無圏点満文によって作った子音の文字表のうち、b から始めるということでした。今回は子音の一覧表を出しましたが、今回からは関係する部分だ








<sup>1</sup> 早田輝洋(2011b)『『満文原檔』の表記に現れた種々の問題 —第1冊荒字檔・昺字檔を中心に—』『言語教育フォーラム第24号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』大東文化大学語学教育研究所、37-91頁。

けを提示するようにしましょう。

### b と p について

吉池：まず b と p を検討し、それから bi と有圈点新満文の fi について検討することにしましょう。

表 1. b, fi, p

有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
.....省略.....			
b fi			
			
※無圈点満文の bi は有圈点新満文の bi, fi, pi の三種に対応する			
p		 ※合字 pu で代用	

中村：有圈点新満文の p の中位形ですが、これは p に相当する無圈点満文の文字を見つけることができなかつたため、子音字と母音字の合字で代用したということですね。

吉池：そういうことです。「満文原檔」の本行の無圈点満文では、b と p の字形は区別されませんが、「行間」の補筆訂正の文には次のようにできます。



poo ting hiang (人名) の poo (合字)



pan (人名)

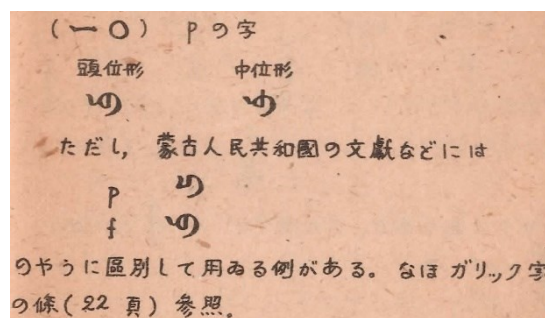
中村：有圈点新満文の b と p の字形は次のとおりです。「右の膨らみの部分にくぼみを付ける」という字形であり、「満文原檔」の“行間”の p の字形と同じです。

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
b[b]			
p[p]			

問題はこのような p の字形がどこからきたか、なにに依ったかということですが、「満文原檔」のモンゴル語文を確認しましょう。

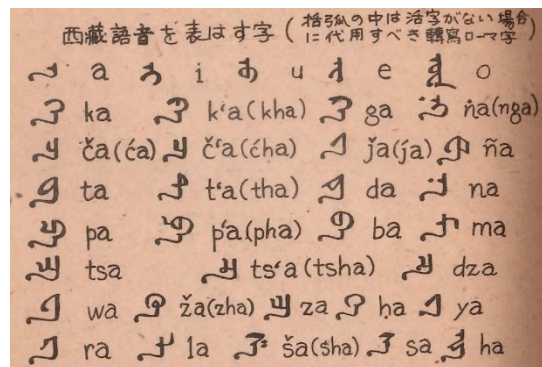
吉池：「満文原檔」のモンゴル語文については、栗林均・海蘭(2015)<sup>2</sup>をみるかぎり p について言及はありません。あるいは p に相当する字を持つ語がでてこないのかもしれないので、参照することはできません。

古典式モンゴル文語については、有圈点新満文に影響を与えたと想定し得る当時の実物資料が、われわれの手もとにないので、確かなことは何も言えないのですが、服部四郎(1946)<sup>3</sup>によると現代モンゴル文語は 16 世紀の末頃から古典式モンゴル文語に著しく近くなったとのことなので<sup>4</sup>、当該書で言及されている現代モンゴル文語で代用しましょう。10 頁の p の字形をみると次のとおりです。



中村：有圈点新満文の  $\text{ᠮ}$  p は、現代モンゴル文語のいずれの p とも異なりますね。服部氏が言及しているガリック文字はいかがでしょう。


吉池：ガリック文字の西藏語音（チベット語音）を表す字母をあげると次のとおりです。



<sup>2</sup> 栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター一報告第 17 号）東北大学東北アジア研究センター。

<sup>3</sup> 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂。手書きによる横書き。『服部四郎論文集 第二巻 アルタイ諸言語の研究Ⅱ』（三省堂、1987 年）所収。後者は活字による縦書き。

<sup>4</sup> 古典期の文字と現代の文字の関係については、服部四郎(1946)に「最初は字の形も畏兀兒字のままであつたが、蒙古人が蒙古語を書くために使ひつづけてゐるうちに、段々形が變つてきて今日の蒙古字となつた。ことに十六世紀の末頃から、形が現代蒙古字に著しく近くなる。」(1 頁)とある。

中村：5行目の、無声無気音の pa と無声有気音の ph の字形は、服部四郎(1946)にあるモンゴル文字の字形と同じです。有圈点新満文の  p の字形はどこからも出てこない。

吉池：現代モンゴル文語の p の字形が用いられるようになった時期について、われわれは分かりませんが、モンゴル語文のように、ガリック文字を利用すれば済むところを、満洲人はそうはしなかったわけですね。

中村：そのことに類似したできごとが元代のパスパ文字に見られます。パスパ文字は、フビライがチベットの僧パスパに作らせた文字です。当時モンゴル人は、ウイグル文字より借用したウイグル式モンゴル文字を使用していましたが、新たに自分たちの文字として「蒙古新字」という国字（近代になってパスパ文字と呼ぶようになった）を作りました。パスパ文字はチベット文字を角ばらせたものです。当時のモンゴル語に b (/b/) はあったが無声有気音の p (/ph/) はなかったため b (/b/) に相当する字形しか用意しなかった。その後、漢語を表記するために p (/ph/) の字形が必要になった。チベット文字の無声有気音/ph/に相当する文字を利用すれば済むところを、そのようにはせずに、すでに作ってあったパスパ文字 b の一部を変形させて新たに文字をつくった。有圈点新満文の p が b の字形から作られた経緯と類似しています。

吉池：パスパ文字も有圈点新満文も、その作成の段において、独自の文字として特徴をだそうとの意識が働いたということでしょう。

中村：その点については確かなことは言えず、現在のところは、なんらかの理由によって独自の字形を作って使用した、と考えて置くしかありません。今後の課題ですね。それでは次に bi と fi の問題に移りましょう。

#### bi と有圈点新満文の fi

吉池：先の表1で「※無圈点満文の bi は有圈点新満文の bi, fi, pi の三種に対応する」と注記し、bi, pi, fi の字形上の区別はないとしました。それに対して有圈点新満文では、次のように bi, pi, fi を区別して表記します。



bigan 野



pilembi 批判する



ficambi 笛を吹く







中村：有圈点新満文では bi, pi, fi を書きわけるとは、「満文原檔」の無圈点満文では、bi と pi と fi を区別せずに bi の字形で表記するということですね。bi と pi についてはいいと

して、bi と fi を区別せずに bi と書くというのはどういうことでしょうか。たしか「満文原檔」の無圈点満文にも f を表記する文字は用意されていたはずですが。いずれにしても、fi の問題は f と w の文字とも関わるので、まず f と w をみておきましょう。

### f と w について

吉池：「満文原檔」の無圈点満文の f と w は、次の表 2 のとおりです。なお、f と w に後続する母音や子音を省略せずにそのまま提示しました。







表 2. f, w









有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
.....省略.....			
f -a, e			
+o, u, (ū) ※+i はない			
※有圈点新満文の fi は無圈点満文では bi で表記される			
w +a, e			

中村：f と w の区別はありませんね。有圈点新満文とはだいぶ異なります。

吉池：有圈点新満文の f と w は次のとおりです。

表 3. 有圈点新満文の f と w

翻字と発音	初頭の字形	中間の字形	末尾の字形
f[f]	 a, e の前	 a, e の前	
f[f]	 i, o, u, ū の前	 i, o, u, ū の前	
w[v]	 a, e の前	 a, e の前	

中村：i, o, u, ū の前の f と、a, e の前の w は表 2 の無圈点満文と同じです。この  と  が原型であり、有圈点新満文はその原型の  と  に、1 画を足した形で  と  を新たに作り、a, e の前の f と a, e の前の w を区別した。もともと、 と  の右に突き出た部分は連

書されていると見るのが自然ですから、これを“プラス1画”と表現するのは適当ではないかもしれませんが、字形の上で1画増えたように見えるものを、プラス1画と呼ぶことにしましょう。

吉池：このプラスされた1画は、圈（◦）や点（丶）のプラス1画と同じ作用をするということですね。原型が無標で、プラス1画が有標です。

中村：プラス1画で、新たな字形を作るというのは、おそらく、太宗の命で有圈点新満文を作ったダハイ達の基本的な方針なのでしょう。𐰉の右の丸目にくぼみをつけて𐰉としてpの文字を作ったのもプラス1画という方針に沿ったものです。

#### 無圈点満文に𐰉 fi という文字連続がない

吉池：いずれにしても、「満文原檔」の無圈点満文をまとめた表2には、頭位（語頭）の音節の𐰉 fi-、中位（語中）の音節の𐰉 -fi-、末位（語末）の音節の𐰉 -fi という文字連続がありません。すくなくとも、今回調査資料とした「満文原檔」の荒字檔、昺字檔、洪字檔（一部）の“本行”には、一つもでてこない。有圈点新満文には𐰉 fi-、𐰉 -fi-、𐰉 -fi（これ以後不都合がないかぎり頭位（語頭）の𐰉 fi を用いて議論をすすめる）という文字連続があるので、これは両者の大きな違いです。

中村：有圈点新満文の𐰉 fi は、「満文原檔」の無圈点満文で、すべて𐰉 bi で現れるということですね。具体例にはどのようなものがあるのでしょうか。

吉池：次のとおりです。下に有圈点新満文でのローマ字翻字を示します。



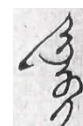
(無圈点)bisa 背

(有圈点)fisa



(無圈点)abiya 豆のさや

(有圈点)afiya



(無圈点)fakcabi 離れて

(有圈点) fakcafi

中村：たしかに頭位（語頭）の音節、中位（語中）の音節、末位（語末）の音節における、「満文原檔」無圈点満文の𐰉 bi は、有圈点新満文で𐰉 fi と現われますね。このような現象は一目瞭然のことなので、すでに先行の研究で言及されているのではないですか。

廣祿・李學智(1970) (1971)

吉池：廣祿・李學智(1970)(1971)<sup>5</sup>の附録の註釈で「bisa 背 新滿文作 fisa。」のように有圈点新滿文で fi となる無圈点滿文の bi について註釈を付しており、この現象に注目しているようですが、特段の解説はありません。

中村：廣祿・李學智(1970)(1971)以外の研究者も、bi と fi の問題は注目したでしょうね。

### 道爾吉・和希格(1983)

吉池：道爾吉・和希格(1983)<sup>6</sup>があります、この現象について、動詞の語尾となる-bi と-fi の問題に着目して言及します。道爾吉・和希格(1983)を要約すると、無圈点滿文における動詞語尾の bi は、「現在終止形」(終止法現在形に相当する) -mbi や「提前付動詞」(連用法先行形に相当する) -fi などいくつかの意味を兼ねたものであったが、有圈点新滿文において文語として規範化がなされ、bi は fi と表記されるようになったとのこと<sup>7</sup>。

---

<sup>5</sup> 廣祿・李學智(1970)(1971)『清太祖朝老滿文原檔(第一冊荒字老滿文檔冊)』(第二冊戾字老滿文檔冊)』(中央研究院歷史語言研究所專刊之五十八) 臺灣：中央研究院歷史語言研究所、中華民國五十九年及六十年。『旧滿洲檔』の、荒字戾、戾字檔、洪字檔(一部)の無圈点滿文を、有圈点新滿文のメレンドルフ式ローマ字翻字を利用して転写したもの。

<sup>6</sup> 道爾吉・和希格(1983)『女真譯語研究』内蒙古大学学报 1983 年増刊。

<sup>7</sup> 「清初の無圈点滿文を記した滿文老檔及び碑文の中に、bi で終わる動詞が多量にある。これらの動詞が表す「時態」は「現在終止形」だけでなく、有圈点滿文の「提前付動詞」の語尾 fi に相当するものもある。有圈点滿文にあっては、無圈点滿文の語尾 bi をすべて fi とする。なぜ fi をもって bi に替えるのか。少なからぬ人たちは、モンゴル文字を借用した無圈点滿文には、唇齒音 fi を表記する字母がなかったため、モンゴル文字の bi で fi を代替するしかなかったと考えた。しかし実際は、滿洲語の唇齒音 f は、無圈点滿文中で wa 行の字母で代替されるのである。例えば、・・・【以下省略】・・・。清初の滿洲語口語は語尾 bi を用いて、少なくとも 2 種の「時態」を表記した。すなわち「現在時態陳述式」と「提前付動詞」の語尾である。無圈点滿文はまだ完全ではなく、厳格な正字や正書法はなかったが、ある程度は当時の発音を反映していた。(改行)ダハイは、有圈点滿文を制定することによって、無圈点滿文の音の精密でない点や字母の不備などの欠点を克服し、滿文を完璧な音節字母式の文字体系とした。このような文字体系の確立にともなった正字正音法によって、無圈点滿文中の混乱した動詞語尾を明瞭に区別し、滿洲語口語音に文字の規範を取り入れたのである。(清初無圈点滿文記録的《滿文老檔》以及碑刻中，有大量的以—bi (ᠪᠢ) 結尾的動詞。這些動詞所代表的時態意義不尽是現在時的終止形態，有些是相当于有圈点滿文中的提前付動詞詞綴—fi (ᠸᠢ)。在有圈点滿文中把無圈点滿文的—bi 詞綴都改爲—fi (ᠸᠢ)。爲什麼用—fi (ᠸᠢ) 来改正 bi (ᠪᠢ) 呢？有不少人認爲，借自蒙文字母的無圈点滿文，不具備表示唇齒音 f 的字母，只能用蒙文字母的 ᠪ (—bi) 来代表 ᠸ (—fi)。實際上，滿語中的唇齒音 f，在無圈点滿文中都用 ᠸ (wa) 行字母所代替的。如：・・・【以下省略】・・・。清初滿洲口語里用後綴—bi 表示最起碼兩種時態意義，即現在時態陳述式和提前付動詞詞綴。無圈点滿文尚不健全，還沒有嚴格的正字、正音法，但在一定程度上反映了當時的語音實際。(改行)達海創制了有圈点的滿文，克服了無圈点滿文分音不細、字母不備等缺陷，使滿文成爲完善的音節字母式的文字体系。随着這種文字体系的建立，在其正字、正音法的作用下，使無圈点滿文中混淆不清的動詞詞綴得到了澄清，使滿洲口語語音得到了文字規範的指導。) 47 頁。こ

中村：動詞語尾に着目すると話は複雑になりますが、そもそも  $bi \rightarrow fi$  という現象は、動詞語尾に限ったことではなく、頭位（語頭）の音節、中位（語中）の音節、動詞語尾以外の末位（語末）の音節にも起こることなので、動詞語尾から離れて、検討すべき問題でしょう。母音字 a, e, o, u, ū の前では  $\text{ᠪ}$  f とし、母音字 i の前では  $\text{ᠸ}$  b としたというわけですが、問題はなぜこのような区別をしたのかということです。

### 早田輝洋 (2011b)

吉池：早田輝洋 (2011b)<sup>8</sup> は、 $bi \rightarrow fi$  を動詞語尾に限らずに起こる現象として、次のように語例をあげて論じています。なお引用文の、左のローマ字は無圏点満文の早田式のローマ字転写で、右の {} を付したものはメレンドルフ式のローマ字翻字です。誤記・誤植とおもわれるものはママとしました。

#### 「 11. 原檔時代の文字 b と音声 [p]

原檔満洲語で b で表記されているものが一般に後代の {b} に対応するのは当然として、b の一部は後代の {f} に対応している。

(58) b と {f} の対応（原檔第 1 冊の出現度数を附す）

- <u>bi</u>	{-fi}	2,000 余	（連用形接辞）
<u>jab</u> iyān	{ <i>jaif</i> iyān}	41	（固有名詞）
<u>taib</u> in	{ <i>taif</i> in}	13	《太平》
<u>bi</u> yongton	{ <i>fi</i> <sup>ᠮᠠᠨᠤ</sup> ngdon}	9	（固有名詞）
<u>bi</u> la	{ <i>fi</i> la}	6	《皿》
<u>bi</u> yawon	{ <i>fi</i> yefun}	6	（固有名詞）
<u>bi</u> keboma	{ <i>fi</i> hebume}	4	《押詰め》
<u>bi</u> U	{ <i>fi</i> yoo}	4	《箕》
<u>bi</u> roma	{ <i>fi</i> rume}	3	《呪って》
<u>abi</u> ya	{ <i>afi</i> ya}	2	《豆殻》
<u>bi</u> sa	{ <i>fi</i> sa}	2	《背》
<u>qabi</u> rama	{ <i>hafi</i> rame}	2	《追詰めて》
<u>qabi</u> raqon	{ <i>hafi</i> rahūn}	2	《狭い》

ここでいう「現在終止形」「現在時態陳述式」は、津曲敏郎 (2002) 『満洲語入門 20 講』 大学書林の終止法現在形-mbi に相当し、「提前付動詞」は連用法先行形-fi に相当すると思われる。

<sup>8</sup> 早田輝洋 (2011b) 『『満文原檔』の表記に現れた種々の問題 — 第 1 冊荒字檔・𠂔字檔を中心にして—』 『言語教育フォーラム第 24 号 言語の研究Ⅱ—ユーラシア諸言語からの視座—』 大東文化大学語学教育研究所、37-91 頁。



qob <u>i</u> n	{ <i>hofin</i> }	2	《瓦瓶》
b <u>i</u> ltaqon	{ <i>fi</i> ltahūn}	1	《むき出しの》
b <u>i</u> yangqo	{ <i>fi</i> yanggū}	1	《末っ子》

」 (76-77 頁)

中村：この現象について早田輝洋(2011b)はどのような見方をしているのでしょうか。

吉池：次に引用するように、bi→fi の bi は、無圏点満文では pi であり、その pi を文字 bi で表記したと想定するようです。

「後代の {*fi*} は第 1 冊ではすべて (58) のとおり bi で表記されている。(逆は必ずしも真ではない。後代の {*bi*} も原檔では bi で書かれている。) 後代の {*fa*} {*fe*} {*fo*} {*fu*} に当る所は *vau* を用いて書いているのであるから、{*fi*} も *vau* の次に *i* を書くことで出来たはずである。それをわざわざ bi を用いている、ということは b が特に張唇狭母音の *i* の前で [p] で発音されていたことを思わせる。有圏点時代でも、一部の子音語幹だったと思われる動詞の連用形は {*fi*} ではなく {*pi*} である。」 (77 頁)。

中村：「 [p] で発音されていたことを思わせる」という控えめな表現が意図するところは必ずしも明瞭ではありませんが、その根拠として、有圏点新満文で動詞語尾の fi が pi として現われる例があることを挙げます。それ以外に何か言及はなされていますか。

吉池：言及はありません。有圏点新満文で動詞語尾の fi が pi として現われる例があることを挙げるのみです。

中村：無圏点満文と有圏点新満文との間に見られる bi→fi という表記の違いから [p<sup>hi</sup>] (早田氏は [p] と表記する) > [fi] という音変化を想定しているのは興味深いですね。これについては、他の研究者も言及していますか。

#### 動詞語尾 -pi → -fi について、先行の議論

吉池：手もとにある書籍をいくつかながめてみます。福田昆之(1987)『満洲語文語文典』横浜市：FLLによると「-fi 非限定の副動詞語尾. 〈動詞語幹+-fi〉…して. あとに続く述語を限定しない. そのため継起性を持つといえる. -fi は元来は-pi であったと見られる. 現在でも一部動詞では-fi の代わりに-pi が用いられる. 例. eldepi「輝いて」.」(277 頁)とあります。

河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会に「-pi は-fi の古形であって、完了連体形の語尾に-ka etc. をとる動詞の一部が-fi の代わりに-pi をとることがある. -pi と-fi は機能上の差異はないが、-pi が-fi に推移する過程において、動詞の語義に多少

の変化はあったと考えられる。-pi が-fi の古形であるごとく、恐らく-ka もまた-ha の古形であって、このことは音声の変遷中に実証できる可能性がある。ただし-pi と-fi とでは、一点において異なる。すなわちある種の動詞には、-pi が接続する時、-m-を伴なって-mpi となるが（例えば wempi, jempi のように）、-fi の場合にはそうはならない。これについては、不規則動詞□3 の項（119 頁）に再説する。」（108 頁）とあります。

中村：不規則動詞の項（119 頁）で再説するとのことですが、どのような議論がなされているのでしょうか。

吉池：不規則動詞表に-pi となる動詞を 34 例あげますが特段の議論はありません。いまそのすべてを引用すると次のとおりです。

非完了終止形		完了連体形	完了連用形
bisarambi	あふれる		bisarapi
colgorombi	抜き出る	colgoroko	colgoropi
deserembi	あふれる	desereke	deserepi
duksembi	赤くなる	dukseke	duksepi
dulembi	通過する	duleke	dulepi
eldembi	光る	eldeke	eldepi
eyembi	流れる		eyepi
farambi	気絶する	(faraha)	farapi
febumbi	風に向かって立つ		fempi
fombi	寒さで膚が荒れる	foha	fompi
guwembi	罪を免れる	guwengke	guwempi
gūwaliyambi	変心する	gūwaliyaka	gūwaliyapi
hūwaliyambi	和合する		hūwaliyapi
hafumbi	通曉する	hafuka	hafupi
jaksambi	深紅色になる	jaksaka	jaksapi
jalambi	中止する	jalaka	jalapi
jalumbi	満ちる	jaluka	jalupi
jembi	耐え忍ぶ	jeke, jengke	jempi
jombi	追想する	jongko	jompi
jumbi	歯を食いしばる	jungke	jumpi
jurambi	出発する		jurapi
juwambi	口を開ける	juwangka, juwaka	juwampi
niorombi	皮肉が青ざめる	nioroko	nioropi

sambi	知る	sangka	sampi
sosombi	下痢する	sosoko	sosopi
šahūrambi	冷える	šahūraka	šahūrapī
šambi	冷水でゆすぐ	(šaha)	šampi
šarambi	白くなる		šarapi
šumbi	文物に通ずる	šungke	šumpi
wembi	溶解する	wengke	wempi
wesimbi	上がる	wesike	wesipi
yumbi	夢中になる	yungke	yumpi

中村：有圈点新満文において、動詞語尾-fiの一部が動詞語尾-piに対応する、ということはあるようです。この点について、福田昆之(1987)は「-fiは元来は-piであったと見られる」とし、河内良弘(1996)は「-piは-fiの古形であって」とし、歴史的な音韻変化を想定しています。

吉池：仮に、-fiの一部の古形が-piであったとして、残りの-fiが-piに溯るかどうかは、わかりません。また、動詞語尾以外のfiが-piに溯るかどうかもわかりません。

中村：河内良弘(1996)を改訂した河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)<sup>9</sup>は「-piは-fiの異形であって、完了連体形の語尾に-ka etc.をとる動詞の一部が-fiの代わりにpiをとることがある。」(86頁)とし「古形」を「異形」に訂正してより客観的な表現になっています。もっともこの場合、-piを-fiの異形であるとして、両者に機能の上で違いがあるかどうか、なぜこのような異形が存在するのか、依然として問題は未解決のまま残されることとなります。

#### 『清書指南』と『滿漢字清文啓蒙』にみる-fiと-piの違い

吉池：-fiと-piの違いが問題となるわけですが、清朝人自身が書いた有圈点新満文の文法書である『清書指南』(1682年序)と『滿漢字清文啓蒙』(1730年序)に<sup>10</sup>、-piの機能について述べた箇所があるので、確認をしてみたいとおもいます。なお、漢語の句読や満語の日本語訳について竹越孝(2007)<sup>11</sup>を参考にした部分があります。

『清書指南』(1682年序)の「翻清虚字講約」には次のようにあります。

<sup>9</sup> 河内良弘・清瀬義三郎則府(2002)『滿洲語文語入門』京都大学学術出版会。第四刷(2017)による。

<sup>10</sup> 『清書指南』『滿漢字清文啓蒙』は共に拓殖大学図書館蔵本による。

<sup>11</sup> 竹越孝(2007)『清代滿洲語文法書三種』(KOTONOHA単刊No.1)古代文字資料館。『清書指南・翻清虚字講約』『滿漢類書・字尾類』『滿漢字清文啓蒙』の三書を収める。

pi. 此字與 fi 字意同而變化耳。蓋因上一字係 an, en, in 頭者而 fi 字之上。不可加 mbi。故必用此字。如 wempi 正以 wen 字之上不可爲 wenfi。而 wen 字又非整語。故以此代之。然亦不盡然者。如 jalufi. jalumpi 亦互用耳。揜之不多見者。書經云。黎民於變時雍。irgen wempi hūwaliyasun oho. (民衆は改まり、穏やかになった)

中村：この説明はかなり読みにくいです。仮に 2 行目の「mbi」を「fi」の誤りとして読むとすると、大意は以下のようになります。

「pi. この字は、fi と意味は同じで（音が）変化しただけである。おそらく上の字が an, en, in など fi の上にある時には、（そのまま）fi を加えることができないので、pi を用いるのであろう。たとえば、wempi はまさに wen の上（下？）なので、wenfi とすることができず、また wen が独立語ではないので、pi に代えたのである。しかし全てがこのようになるわけではなく、jalufi と jalumpi の如きはどちらも用いられるが、総じて稀である。」

以上を要するに、-pi は、-fi と意味が同じで、-pi が変化したものにはすぎない。語幹に an, en, in があるばあい、mpi が後続し、wenfi とはならず wempi となると述べているようです。音韻変化として pi [p<sup>h</sup>i]（早田氏は [p] と表記する）>fi を認める立場から見ると、鼻音が先立つ場合にはその変化は起きず、pi が保存されたということでしょう。ただし、先ほどの河内氏の挙げた 34 例を見る限り、m を伴わない -pi もあるので、なお、検討を要します。

吉池：ちなみに、語幹の an, en, in 等が -m になるのは、両唇音の p の逆行同化で、n が m に変化するわけですね。このような同化は無圈点満文によく見ることができます。

中村：『清書指南』によると両者に特段の違いはないようですが、『滿漢字清文啓蒙』の記述はどうでしょう。

吉池：『滿漢字清文啓蒙』（1730 年序）の「清文助語虚字」には次のようにあります。なお句読は原文に付されているものです。

pi 與 fi 字詞義稍同。乃形容事物太甚之語。在字尾聯用。

meifen sampi 直伸着脖子。（首を真っ直ぐに伸ばしながら）

angga juwampi 大張着口。（口を大きく開けながら）

wempi 化開了。（溶けはじめて）

hūwaliyampi 和氣了。（穏やかになって）

colgoropi 超然出衆了。（超然と抜きん出て）

jalumpi 遍滿了。（あまねく満ちて）

yumpi 沉湎貪進去了。(耽溺し貪るようになって)

jompi 提起了。(意見など)もち出して)

中村：この漢語も、「稍同」とするところなどは、やや違和感がありますが、その大意をとれば、-pi と-fi の字義はほぼ同じであるが、-pi のほうには事物が甚だしいことを形容する用法があるということのようです。

吉池：私の手元にある現在の満洲語文語の入門書や辞典には、上記のような-pi の機能は見あたりませんが、このような-pi の機能についての『満漢字清文啓蒙』の記述は検討に値するものとおもいます。先に挙げた 34 例の-pi の用例ですが、その多くが状態を表す動詞です。状態を表す動詞と、程度のはなはだしさを表す機能は相性が良く、たまたま状態を表す動詞が多かったというのではないのでしょうか。

中村：-pi の機能についてはいますこし情報が欲しいところです。-pi ⇔ -fi の問題は今後の課題としておきましょう。

さて、「満文原檔」の無圏点満文は、母音字 a, e, o, u, ū の前では 𐩺 f とし、母音字 i の前では 𐩻 b としたわけです。𐩺 fi-, 𐩻 -fi-, 𐩼 -fi という文字連続はありません。しかし 33 年後以降の有圏点新満文では、𐩺 fi-, 𐩻 -fi-, 𐩼 -fi があり、bi の一部を fi に置き代えた。なぜこのようなことが起こったのか、大きな問題です。

#### 無圏点満文にはなぜ fi という文字連続がないのか

吉池：この問題の根本は、文法に関わる問題ではなく、bi と fi という音結合に関わる問題として処理する必要があります。無圏点満文に bi と fi という音結合があり、区別されていたが、その表記については、区別せずに bi と表記したという可能性も皆無ではないのですが、道爾吉・和希格(1983)が指摘するように、fa, fe, fo (fo と fu) を表記しておきながら、fi だけ f を利用せず b を利用して bi と表記したというのでは理屈にあいません。

中村：具体的に述べると、太祖ヌルハチの命を受けて、エルデニ・バクシ等が、モンゴル語文を参考にして無圏点満文を作った時に、何らかの理由に依り、fi という音結合の表記は作らなかったが、bi (bi, pi) という音結合の表記は作った。その後、太宗ホンタイジの命を受けてダハイ等が有圏点新満文を作った時には、文字表記 bi のほかに fi も作り、bi の一部を fi で表記したということになります。

吉池：どうしてこのようなことが起こるのでしょう。

中村：方言の違いが反映したのではないのでしょうか。

吉池：方言の違いと申しますと？

中村：エルデニ・バクシ等の満州語音には fi という音結合はなかった。fi に相当する部分は [b] (半有声音か) もしくは [p<sup>h</sup>] (無声有気音) であったため文字 bi で表記した。33 年後のダハイ等の文字改革の時の主要な方言には fi があったので、ᠮ fi-、ᠮ -fi-、ᠮ -fi という文字連続を作り fi を表記した。このように想定すれば、一応の説明はつきます。

吉池：方言の違いが反映したという想定には、基本的には、私も賛成なのですが……。

中村：“基本的には” という、なにかほかに考えがあるようですね。

吉池：エルデニ・バクシを含む、ヌルハチおよびその親族、高官よりなる集団があり、そこで満洲語が話されていた。この集団は、方言を異にする人や、言語そのものを異にする人の寄せ集めとして成り立っているというのが実状ではないかと想像します。そのような集団の中で、モンゴル文字の字母を用いて満洲語をどのように表記するかということが問題になったはずです。

私はヌルハチの時のエルデニ・バクシたちが依った有力な方言にも、fi はあったと想定したいのです。

中村：具体的にはどういうことでしょうか。

吉池：同一方言内に存在する異読(文章語音と口頭語音などの違い)に起因すると想定してもいいのではないのでしょうか。一つの方言のなかの、表現の差異が反映したとするものです。

中村：“表現の差異”、ですか。

吉池：エルデニ・バクシたちが依った有力な方言のなかで、比較的が高齢で古風な表現をする人たちには fi がなく bi ([bi] 場合によっては [p<sup>h</sup>i]) があった。他方比較的若い人たちには bi と fi の両者があった。全体としてみたばあい、bi と fi の両者を持つ人たちのほうが優勢であったかもしれません。

中村：モンゴル文字の字母で満洲語を書いて満洲語の文章語を作るときに、表現の取捨選択などがあつたはずで、或る程度の規範化がなされたとするのが自然です。その規範化の時に、fi ではなく、古風な表現の bi に依つたと想定したいということですね。

吉池：そういうことです。

中村：いづれにしても、なんらかの事実の支えがほしい。ツングース諸語や現代方言の状況を知りたいものです。

### ツングース諸語や満洲語方言

吉池：D・O・朝克(1997)<sup>12</sup>によると、両唇の無声無気音 b[p] は満州・ツングース諸語に等しく出現する。両唇の無声有気音 p[p<sup>h</sup>] の出現頻度は満州・ツングース諸語を通じて低いが、鄂温克語（エヴェンキ語）・鄂倫春語（オロチョン語）・満洲語は、錫伯語（シボ語）・赫哲（ヘジェン語）語よりも高い。問題の唇歯音 f について見ると、満洲語には、fəxi “脳”（脳髓）、oforo “鼻子”（鼻）、錫伯語には faχun “肝”、maf “天花”（天然痘）、赫哲語には fisa “脊背”（背中）、mafa “祖父” のように f はあるが、鄂温克語や鄂倫春語には f はないとのこと<sup>13</sup>。鄂温克語や鄂倫春語には f はないが無声有気音の p [p<sup>h</sup>] があります。鄂温克語については、胡増益・朝克(1986)<sup>14</sup>によると、pəfχələrən “踢”（蹴る）、xapotta “氣管”（気管）、pəjtin “飛機”（飛行機）、piltərən “溢”（あふれる）、pii “毛筆”（ふで）などがあります。飛行機の例のように、f を含む中国語の語彙が鄂温克語に借用された場合、pən “粉”、pəŋχan “鳳凰” のように [p<sup>h</sup>] となります<sup>15</sup>。鄂倫春語については、胡増益(1986)<sup>16</sup>によると、panfaran “生氣”（怒る）、uləptən “草木灰”（草木の灰）、nulgirəp “踢”（蹴る）、pipiŋlee- “批評”（批評する）などがあります。

中村：満洲語口語の方言、錫伯語（シボ語）、赫哲語（ヘジェン語）に、b と f があるとのことですね。bi はいいとして、fi という音連続の状況はどうでしょう。

吉池：赫哲語（ヘジェン語）は、安俊(1986)<sup>17</sup>によると、fisa 背中、fidzan 箱、afinə-眠るの 3 語がみえます。満洲語文語の連用法の fi に近い動詞語尾としては、ki, dzi, nəmi, mi, rə などがあり、fi という音連続はありません。錫伯語（シボ語）は、山本

---

<sup>12</sup> D・O・朝克(1997)『滿一通古斯諸語比較研究』北京：民族出版社。

<sup>13</sup> 「f—唇齒清擦音[f]。輔音 f 出現于滿語、錫伯語、赫哲語，而且多数是在這些語言的詞中或詞首出現，在詞尾使用的比較少，尤其在滿語和赫哲語里詞尾很少使用輔音 f，例如：滿語 fəxi “脳”、oforo “鼻子”，錫伯語 faχun “肝”、maf “天花”，赫哲語 fisa “脊背”、mafa “祖父”。比較而言，輔音 f 在滿語和錫伯語中的使用率高于赫哲語。鄂温克語和鄂倫春語中没有 f 音。」(29 頁)。

<sup>14</sup> 胡増益・朝克(1986)『鄂温克語簡誌』(中国少数民族語言簡誌叢書) 北京：民族出版社。

<sup>15</sup> 「含有 f 的漢詞，借入鄂温克語後，一般讀作 [p<sup>h</sup>]，如 pən (粉)、pəŋχan (鳳凰) 等。」(8 頁)。

<sup>16</sup> 胡増益(1986)『鄂倫春語簡誌』(中国少数民族語言簡誌叢書) 北京：民族出版社。

<sup>17</sup> 安俊(1986)『赫哲語簡誌』(中国少数民族語言簡誌叢書) 北京：民族出版社。

謙吾(1969)<sup>18</sup>によると、fi は頭位（語頭）の音節だけでも 17 単語あり、動詞連用法の fi に相当する動詞語尾 fi もあります。満洲語口語の嫩江方言は、恩和巴圖(1995)<sup>19</sup>によると、頭位（語頭）の音節だけでも 32 単語あります。もっとも連用法の fi に相当する動詞語尾 fi はありません。なお、黒龍江方言のまとまった資料は手もとにないため確認はできません。

中村：手もとにある資料によるかぎり、b, f があって、fi という音連続がない方言は見出せないようですね。

ところで、「古風な表現の bi により fi は用いなかったため」と想定したいとのことですが、古風な表現というと、女真文字による女真語の状況が気になります。

吉池：女真語というと、明代女真語としては「女真館訳語」と碑文の「永寧寺碑」があります。金代女真語としては碑文や歴史書の漢字音訳女真語があります。動詞語尾を中心とせざるを得ませんが、これらの資料に反映する bi と fi について議論するとなると、だいぶ紙数が必要になります。

中村：無圏点満文に bi があり fi がない。有圏点新満文には bi も fi もある。この違いは大きな問題です。満洲語の文字表の議論からやや離れますが、二種の満文の質の違いにかかわる問題かもしれないので後回しにするわけにはいきませんが、今回はこれまでとして、次回に女真文と満文の bi と fi の問題を検討しましょう。

---

<sup>18</sup> 山本謙吾(1969)『満洲語口語基礎語彙集』東京：アジア・アフリカ言語文化研究所。

<sup>19</sup> 恩和巴圖(1995)『満語口語研究』呼和浩特市：内蒙古大学出版社。